

場所の時代

講師：隈研吾氏（建築家）

私たちは今、「場所」を主役とする脱工業化社会に生きている。また、東日本大震災を機に人と場所をつなぎ合わせる媒介として、建築が果たす役割が注目されている。「新国立競技場」のデザインを手掛ける建築家の隈研吾氏が語った。

日本の震災を転換点に 自然と共に生きる

災害によってまちを復興するに際して、まちが発展する場合と衰退する場合がある。1755年に発生したリスボン地震は、栄華を誇ったポルトガルの衰退を招いたとされる。その一方で周辺のパリでは、リスボン地震を教訓として、それまでの密集したまちを改造し近代的なまち並みをつくりあげた。両者を分けたのは、大災害を機に、強い意志で自己改革を成し遂げられたかどうかによるものだったと考える。

大災害は人間の歴史を変えるとされる。リスボン地震は、コンクリートや鉄の普及を促し、「科学や技術によって人間が救われる」という信仰を生み出した。また、1871年に起きたシカゴ大火災をきっかけに、アメリカではコンクリートが急速に普及し、世紀をまたいで超高層ビルの建設を促した。

それでは日本で発生した、阪神・淡路大震災、東日本大震災、そして今回の熊本地震という災害は、何をもちたのだろうか。従来のような科学や技術に対する信仰は、もはや通用しない。コンクリートや鉄でどんなに堅固な建物を建てても、それだけでは十分ではない。自然は必ずその先を行く。従って、われわれは自然と闘うのではなく、自然と共に生きていかなければならない。そうしたことを気づかせてくれた点で、日本における震災は、人類

の歴史の大きな転換点だといえる。

自然素材や場所の素材を 建築に取り入れる

これからの時代は、それぞれの場所にもともとあるものを大切にする「場所の時代」だと考える。建築においても、その場所にある素材を取り入れることが重要になる。特に自然の力を活かして、木などの自然素材を積極的に使うべきだ。また、先人の知恵を活かすことも大切である。かつて海に近い土地では、目印となる場所に神社を建て、住宅などの建物はできるだけそこより高い場所に建てるようにしていた。東日本大震災でも、そうした建物の多くは無事だった。自然を恐れた先人たちの知恵を忘れてはいけない。

こうした思いは、私が設計してきた建築に反映している。栃木県の「那珂川町馬頭広重美術館」には、里山の杉、職人の手による手漉き和紙、地元の石切場の石などを使うと同時に、入り口を里山側に配置して里山との結び付きを重視している。かつて里山は、人々のエネルギー源であり、農業にも欠かせない存在だったが、東京依存が強まる中で次第に荒れ始め、それによって災害が発生しやすくなってしまった。そこで里山と美術館を結び付けることで、里山を中心とした地域の循環を守ることにつなげたいと考えた。

新潟県長岡市の市役所を中心とした複合施設「アオーレ長岡」でも、木や

和紙、^{つむぎ}綿などの自然素材や地元の素材をふんだんに使っている。土の温かみが感じられる場所として、昔の農家の土間をヒントにした貫通型の広場「ナカドマ」も設けた。

2020年東京オリンピック・パラリンピックでは、主会場となる「新国立競技場」をデザインすることになった。近くに神宮の森があることから、木を使い、低い建物をつくることをテーマとした。特にひさしで影をつくるデザインは、日本のお家芸であり、木を長持ちさせる機能がある。屋根も木と鉄の複合構造となっている。

世界で高く評価される 日本の建築文化

「自然の素材」や「場所の素材」を使った建物は、日本だけではなく世界で高く評価されている。

私が設計したアメリカ・ポートランドの日本庭園の増設では、地元の木材や石材を使用して、日本の村を想起させる設計を行った。その他にも、2023年に完成予定のパリの「サンドニ・プレイエル駅」などで、日本的発想に基づいた提案を行い、コンペを勝ち抜くことができた。海外でも日本の優しく、柔らかな空間が求められていることを実感している。時代は大きく変化しており、自然と人間が互いに敬いながら生きていく時代が始まっている。日本の建築文化は、今後ますます注目を集めていくことだろう。